

会員募り小学校支援

子育てで充実へ寄付創設

過疎高齢化にあえぐ出雲市伊野地区（人口1330人、421世帯）の自治協会が4月末、一口5千円の寄付で「伊野ふるさと会員」を募り、寄付金を子育て事業に充てる取り組みを始めた。寄付者に伊野の特産品を返礼する「ふるさと納税」のような仕

地域存続外部の力活用

市東端にあり、宍道湖と日本海に面する伊野地区は高齢化率が32%。15年前は100人以上いた伊野小の児童数は半減した。201

組んで、伊野小学校（児童46人）の支援に生かすとともに、地区を知ってもらい、U・Iターンにつなげたい考え。人口減少が進む地域を、外部を巻き込んで存続させる事例となりそうだ。（岡田素衣）



伊野小学校の前を歩きながら伊野ふるさと会員について話す自治協会のメンバー——出雲市野郷町

2年に市教育委員会が隣接地区などの2校との統合を提案したが、住民は廃校による人口減少の加速を懸念し、15年に反対を決めた。

並行して持続可能なまちづくりを模索。30年代に人口が千人を切る予測を踏まえ、伊野小と住民に島根大生が加わり、自然の中で子どもと遊ぶ「伊野ベーション」、児童が育てた野菜や魚介類の産直市「伊野いち」などに取り組んでいる。

「ふるさと会員」は、住民だけでなく、より多くの人の意見や支えでまちづくりを進めようと、自治協合理事会が企画した。

地区内外の誰でも寄付できる。返礼品は約3千円分の特産品で、コメ、シジミ、サザエ、番茶・漬物の4種類を用意した。寄付金は伊野小への教育後援費に充て、修学旅行の経費補助など校外活動の充実に役立ててもらおう。伊野ベーションや国際交流活動への活用も

想定する。伊野小の魅力を高め「毎年10人の子どもが生まれる伊野」を当面の目標とする。自治協会の多久和祥司会長（65）は「持続可能な伊野をつくるために、多くの人の知恵や力を借りたい。生き生きと暮らしている姿を見てもらえば、U・Iターンにつながるのではないかと期待する。」

自治協会はホームページを立ち上げ、寄付やまちづ